第４６号　　平成１２年２月２９日

北海道国際理解教育研究協議会　会報

北海道国際理解教育研究協議会 事務局編

＜巻頭言＞

今，私たちに期待されていること

北海道国際理解教育研究協議会
会 長　　高 橋　承 造
（札幌市立苗穂小学校長）

かつて，国際理解教育が学校教育の中に取り入れられ始めた頃には，外国の話をしたり外国の事を扱うことが国際理解教育と思われていたことがありました。

それから外国の人が授業に直接登場し，その外国の人が自国の事を話したり，自国から持ってきた物を見せたりして日本との違いを浮き彫りにし，異文化を知ることこれが国際理解教育であると主張されていたこともありました。

最近の科学技術の進歩や経済の発達は驚くほどめざましく，世界中の人や物や情報が地球全体を自由に駆けめぐるようになりました。しかし，一方では依然として世界の各地で紛争が止まず，たくさんの尊い命が奪われたり貧困や不自由な生活を強いられている人が数多くいます，また，環境汚染や自然破壊が想像を超える速さで地球全体を覆い，異常気象等が日常的になってきています。

紛争や環境汚染・自然破壊は，まさに人類の存亡にも影響を与える危機感さえ感じずにはいられなくなりつつあります。

これらの事柄は，自国だけで解決できる問題ではありません。また，異文化理解という受け身の姿勢だけでも解決しません。もっともっと積極的に自分は地球という宇宙船に乗せてもらっているのだという自覚を一人ひとりが持ち，地球とのかかわりで自分を見れる広い視野で，今自分に何ができるのか，何をなすべきかを考え積極的に行動できることが必要ではないかと考えます。

それが「地球市民」としての意識であり，その意識を育てることが国際理解教育に寄せられている期待ではないでしょうか。

本協議会では，研究部の研究推進計画に基づいて各地区でそれぞれの地域の実態に合わせた実践がなされております。全道研究大会では，各地区の実践をもとに授業公開や研究発表により，成果を交流し研究を深めて参りました。

その実績が認められ，昨年１２月に日本教育研究連合会より山内武道前会長が全国表彰を受けられました。勿論この表彰は，山内武道前会長が本協議会を導かれた功績に対してではございますが，私たち会員といたしましても誉れに感ずるところでございます。

山内前会長の今回の受賞を励みとして，会員一人ひとりがさらなる研鑽を積み国際理解教育に寄せられている「地球市民の育成」と言う期待に応えたいものです。

表　彰

日本教育研究連合会表彰のご報告とご挨拶

山内　武道
前北海道国際理解教育研究協議会会長）

第18回　北海道国際理解教育研究会・北見大会が盛会裡に終えられたことをお聞きしました。皆様の熱意とご努力に心から敬意を表します。

さて，私こと，財団法人・日本教育研究連合会の平成１１年度表彰の対象者ということで，去る１２月１日，国立教育会館での表彰式に参加し，表彰状と記念品を受け取って参りました。表彰式には，“学校教育における国際理解教育の実践のあり方”という内容が書かれてありました。全道各地区の皆様とともに国際理解教育の発展のために活動してきたことが，表彰の理由になったものと考えています。私にとっては身に余る光栄で心の引き締まる思いをしております。

全国規模の各研究団体から推薦を受けた個人と団体５３名が今年度の対象となり，国際理解教育では兵庫県の研究会とともに不肖私も受けさせていただきました。

思い起こしてみますと，平成８年から３年間にわたって北海道国際理解教育研究協議会の会長という重責を担わせていただき，全道各地区の皆様と楽しく充実した研究活動と組織づくりを進めることができました。もちろん，この表彰はご支援とご協力を賜りました皆様とともに受けたものであることは申し上げるまでもありません。

時あたかも，社会の変化とともに学校教育においても国際理解教育の重要性が強く認識され，全道各地区で研究内容の面でも組織の規模の面でも飛躍的に充実・発展が進んだ時機に，皆様と研究活動を行うことができたことを大変幸せに思っています。

その間，札幌・釧路・余市で全道大会が開催され，いずれの研究大会の研究内容・研究体制とともに全国的に大きな評価を受けました。また，釧路大会は全国大会として多くの方々にご参加いただき，北海道の国際理解教育の実力を全国に示す機会でもあったと思っています。皆様のご支援とご協力にあらためて感謝申し上げます。

全道各地区の研究会が組織的にまとまり，確かな計画によって研究を推進している実態は他の都府県には類の見ないことです。それが全国的にも評価され，また大きな期待をかけられていることは間違いのないところです。それぞれの地区研究会が対等な立場で北海道国際理解教育研究協議会に参加し責任と意欲を持って研究活動を行っていることが大きな要因になっているものと思います。また，それを組織としてまとめ，研究の推進を調整していくのが事務局の役割であり，決して本部・支部の関わりではないことを確かめ合ってきました。今後も，その基本的な理念を大切にして研究活動を進めていただくことを心から願っています。

また，新しい学習指導要領の中の「総合的な学習」では，国際理解教育が重要な位置を占めることが予想され，そのことを踏まえた全道各地区での研究活動が期待されると思われます。皆様のご健闘を心よりお祈りし，お礼のご挨拶とさせていただきます。

事務局便り

平成１１年度
「派遣教員及び帰国教員研修会」開催される

北海道国際理解教育研究協議会事務局

平成１２年1月１４日(金)に北海道教育委員会から後援をいただき，平成１１年度の「派遣教員及び帰国教員研修会」が札幌市立真駒内緑小学校を会場に開催された。

この研修会には全道各地から，平成１１年の３月に海外日本人学校から帰国された先生方と平成１２年の４月から海外日本人学校に派遣される先生方を中心に，全道各地から国際理解教育に関心を持ち研究を推進されている先生方，そのご家族など多くの方々の参加者を得ることができた。

開会式では，北海道教育委員会よりご来賓としてご臨席いただいた白崎三千年（生涯学習部小中・特殊教育課長）様よりご挨拶をいただき，今年度の道教委の重点施策である国際理解教育の現状と，今後の教育に要請される課題とのかかわりについてご教唆いただいた。

その後，５つの部会に分かれて実践発表が行われ，平成11年度に帰国した教員から在外施設における教育の実情や現地での教育実践等についての報告後，研究協議に移り派遣教員の現地での教育活動への在り方や今後の本道における学校教育の中での，国際理解教育の在り方について話し合われた。

また，実践発表に引き続き，平成１２年度４月より在外教育施設派遣教員として本道より派遣される教員を中心に派遣地域別研修会が持たれ，在外教育施設の教育の現状や現地での生活の様子及び派遣に係わる準備等について研修し，派遣教員としての自覚を深めた。今年度は初めて，派遣教員の奥様の参加もあり研修内容も一段と充実したものとなった。

今回の「派遣教員及び帰国教員研修会」では国際理解教育を通じて，これからの社会を生きる子供たちに，国際社会で生きていく力をつけるために，今まで以上に自ら考え，問題解決できる力の育成することの大切さや，今後の全道の国際理解教育の指導にあたる教師としての姿勢や心構えについて再度確認するなど，多くの成果をあげ盛会のうちに終了することができた。

（事務局次長　後藤　宏）

平成１２年度
派 遣 教 員

平成12年度 在外教育施設派遣教員

管内	所　属	職　名	氏　名	派　遣　先（派遣国）
網走	清里町立江南小学校	教　頭	光成　英二	シンガポール（シンガポール）
渡島	上磯町立石別中学校	教　諭	長田　修一	ブラッセル（ベルギー）
渡島	函館市立柏野小学校	教　諭	加藤　一明	ナイロビ（ケニア）
後志	小樽市立朝里中学校	教　諭	斉藤　一郎	リオデジャネイロ（ブラジル）
後志	小樽市立色内小学校	教　諭	柳澤　久美	アムステルダム（オランダ）
空知	奈井江町立奈井江中学校	教　諭	小野　篤夫	デュッセルドルフ（ドイツ））
上川	中富良野町立旭中小学校	教　諭	石黒　雄治	クアラルンプール（マレーシア）
上川	風連町立日進中学校	教　諭	佐々木智美	ハンブルグ（ドイツ）
胆振	室蘭市立朝陽小学校	教　諭	清水　　卓	クアラルンプール（マレーシア）
胆振	登別市立登別温泉中学校	教　諭	池田　健人	ジャカルタ（インドネシア）
胆振	豊浦町立豊浦中学校	教　諭	兼平　裕子	マニラ（フィリピン）
十勝	帯広市立稲田小学校	教　諭	笠松真一郎	パナマ（パナマ）
十勝	鹿追町立鹿追小学校	教　諭	戸塚　　信	ジャカルタ（インドネシア）
十勝	音更町立音更中学校	教　諭	猪股　宏亮	ドーハ（カタール）
釧路	阿寒町立中徹別小学校	教　諭	中原　英雄	モスクワ（ロシア））
釧路	標茶町立塘路中学校	教　諭	伊藤　伸一	バンコク（タイ）
根室	別海町立別海中央中学校	教　諭	藤原　秋彦	台北（台湾）

3年間の活躍をご期待申し上げます

平成12年3月　帰国教員

3年間の職務，大変お疲れさまでした。無事の帰国をお祈り申し上げます。

管内	所　属	職　名	氏　名	派　遣　先（派遣国）
石狩	新篠津村立新篠津中学校	教　諭	和田　康彦	上海（中国）
石狩	札幌市立八軒西小学校	教　頭	池田　幸一	シンシナティ補習授業校（アメリカ合衆国）
石狩	札幌市立発寒南小学校	教　諭	古里　和雄	マドリッド（スペイン）
石狩	札幌市立厚別北小学校	教　諭	横川　　隆	アガナ（アメリカ合衆国）
石狩	札幌市立山鼻中学校	教　諭	山本登志一	アンカラ（トルコ）
渡島	函館市立宇賀の浦中学校	教　諭	岡崎　美加	マニラ（フィリピン）
後志	小樽市立長橋中学校	教　諭	佐藤　英治	釜山（大韓民国）
後志	積丹町立野塚中学校	教　諭	豊田　雅典	ミュンヘン（ドイツ）
上川	旭川市立末広小学校	教　頭	喜多　昭二	アスンシオン（パラグアイ）
上川	旭川市立広陵中学校	教　諭	若本謙一郎	シンガポール（シンガポール）
上川	旭川市立星園中学校	教　諭	堀　　秀樹	アブダビ（アラブ首長国連邦）
上川	旭川市立旭川第三小学校	教　諭	柿森　淳一	フランクフルト（ドイツ）
胆振	白老町立萩野小学校	教　諭	工藤　信司	大連（中国）
日高	浦河町立浦河小学校	教　諭	松井　伸樹	パリ（フランス）
十勝	帯広市立森の里小学校	教　諭	佐藤　敬示	バルセロナ（スペイン）
十勝	音更町立音更小学校	教　諭	野中　利晃	台北（台湾）
釧路	釧路町立富原小学校	教　諭	濟藤　和彦	ロンドン（イギリス）

胆振大会
報　告

胆振国際理解教育研究大会に参加して

白石　邦彦
（札幌市立青葉小学校）

1999年 11月 26日に，室蘭市立本室蘭小学校において胆振国際理解教育研究大会が開催された。2000年度の全道大会を控え，プレ大会と位置づけられた研究大会には胆振管内の先生方が多数参加された。

札幌から参加させていただき，次年度に向けての熱気が感じられ私自身勉強になった大会であった。

1．公開授業に関して

研究テーマ 広く世界に目を開き，未来を切り拓く児童・生徒の育成」～身近な教材を通して，自分を見つめ，共生の心を育てる授業の構築をめざして～ を掲げ『しぜんをいかしたしごと～乳牛をかう農家～」という単元での授業が公開された。

学校の近くの農家に子供たちが取材に出かけ，それらをグループでまとめていくという単元であった。グループで，調べ学習・発表学習をする中で，対象や事象に対する考え，自分と他者の考えが対立する場が生じると考え，そこでの子供の表現力を引き出し問題解決にあたらせようと考えた授業であった。また，取材の過程でお世話になった人々との関わりの中から人とふれあう楽しさを感じさせようとしていていた。

授業では，今まで調べたことをグループで発表する場面が公開された。各グループは，自分たちの調べてきたことを，ビデオや模造紙にまとめた物を見せながら工夫して発表していた。ここでは，資料をどのように使いアピールしていくかということが各グループ考えられていて，聞いている子供たちにインパクトを与える発表が行われた。取材にあたって子供たちは，電話やファックスなどを用いて資料集めを行っていた。今後子供たちが情報を集める際に，このような手段を用い情報を収集していくことが必要になってくると考える。そして，それらの情報をどのように自分たちで整理し必要な物を用い問題を解決していくかということが大切であると考える。

各グループが発表をしていく際に，話し手と聞き手の意識がもう少しあるとよかったのではないかと考えられた。子供たちは，掲示物等を見て事前に質問計画表を作成していたが，それをどのように生かしていくかが今後の課題である。自分たちのグループで調べたことと関連づけながら他のグループの発表を聞いたりすることにより，一層理解が深められると考えられる。

身近な素材を生かし，自分たちの地域を見つめ世界とのつながりを感じていく子供たちの姿が現れた授業であった。

2．分科会について

３つの分科会で話し合いがもたれた。私は，第１分科会に参加した。

室蘭市立朝陽小学校の清水卓先生は 教室でのネタは？」ということをテーマに提言された。発表は，教育改革の流れを押さえ，これからの国際理解教育の位置づ

胆振大会
報　告

けを的確にとらえたものであった。
　また,国際理解教育の授業実践に関しては,実践化のポイントを次のようにとらえ具体的な実践をしているという報告があった。

＜基本的なスタンス＞
　体験的な学習,課題解決学習,知識・理解を通して実践的な資質や能力を育成する。

＜授業構想のポイント＞
・子供に育てたい資質や能力を明確にする。
・授業を構想するポイントとなる視点を明確にする。
・学習の構想を練る。

　分科会での話し合いの２つ目は，ビデオを参会者が視聴し，その後グループに分かれ「この後の授業を考えよう」ということで話し合いがもたれた。ビデオはマザー・テレサの活動に関するビデオで，小学校と中学校の２つのグループに分かれ話し合った。分科会というと，発表がありそれに対して質疑応答するというパターンが多いが，今回のこのようなワークショップを取り入れた分科会は今後の参考になる企画であった。

３．大会に参加して

　今回の大会は，胆振国際理解教育研究会の意気込みの感じられる大会であった。特に，「国際理解教育に関わる意識調査について」というアンケート集約は，各地域で参考になるものであった。子供の実態に即して国際理解教育を考えていこうということの大切さを教えられる資料である。是非これを全道に広げ，北海道国際理解教育研究協議会の財産としていくとよいのではないかと考える。
　北海道の研究が具体的に研究部より提案されていることにより，それをもとに各地域の特色を出した研究実践が行われていると感じられる。今後も，各地域の研究が授業・子供をもとに語られ深められていくことを期待している。
　2000年度の全道大会での発表が楽しみに感じられる今回の大会であった。

根室大会
報　告

「根室管内国際理解教育研究会」に参加して

高橋　承造
（札幌市立苗穂小学校 校長）

今回の根室地区の研究会は2月９日（水）に，標津町立薫別小中学校で根室教育研究所との共催により開催されました。

薫別小中学校は僻地３級で，児童生徒数が全校で１５名の小規模校です。

公開された授業は，総合的な学習の時間を視野に入れた小学校における英語学習で，1年生から3年生までの７名の子供たちが主役でした。薫別小学校では，標津町に配属されているＡＬＴのブライアン・ゲイナー先生に，小学校の教室にも月に１～２回来てもらい，子供たちの興味にあわせた英会話を始めたそうです。担任である谷地田先生とブライアン先生の教材研究や指導力は勿論ですが，小人数であると言う利点を生かした密度の濃い授業となっており，子供たちは短期間で，挨拶・天気・体の部位の名・色・果物・年齢・走る，座る等の行動の様子を，きれいな発音で話せるようになっていました。

本時では，自分たちが知っている英語を使ったゲームを公開してくれました。どの子供たちも目を輝かせ，楽しそうに学習していました。

授業後の話し合いでは，「小学校における英語教育のあり方と中学校への接続」と「総合的な学習の時間と国際理解教育のあり方」の二点について話し合われました。

中学校での英語はコミュニケーションの手段としての学習に重点があり，小学校における英語学習は異文化の直接体験である。小学校での体験が中学校での英語学習への意欲と自信となる事を目指している。また，国際理解教育が求めている子供像は，「地球市民としての意識」を持つ子供の育成であり，自分個人や自国だけの視野で物事を考え行動するのではなく，常に宇宙船地球号の乗組員としての全地球的な視野と自覚が必要であること。さらに総合的な学習の時間の内容として国際理解教育は，子供たちの関心や意欲に結びつく魅力ある学習内容であるが，英語学習を総合的な学習の時間として扱うにはいろいろと工夫が必要である等が話し合われました。

授業参観や話し合いへは根室管内から40名もの先生が集まり，真剣な研究討議がなされました。若い先生方も多く，国際理解教育や総合的な学習の時間に関する関心の高さを感じました。研究討議の間は小雪が降り帰り道に不安を感じさせられましたが，研究会が終るころには青空が顔を出し，校舎の向かいの夕日で銀色に輝く尾根を野生の鹿が３０頭ほど走り去る光景が見られ，国立公園の自然の雄大さとともに研究会の収穫の大きさをを感じさせてくれました。青山会長さんを中心にしてまとまりのある根室地区の活動と，研究への熱意を強く学ばさせていただきました。また，薫別小学校の児童の皆様と教職員の皆様のご協力に心から感謝申し上げます。

（文責 高橋承造）

各地区の
研究概要①

檜山地区研究の歩み

1. 研究主題

教室を国際化し，共生の心を育てる国際理解教育の推進

2. 研究主題設定の理由

ボーダレスといわれる現代において，人種・国境・思想・心境を越えた「共生」が叫ばれているが，学校（教室）では，相反するさまざまな問題に直面している。このような実態を踏まえ，本会は，義務教育における国際理解教育を推進していく上で，「教室内の国際化」，「教室内の共生」が肝要と考え，本主題を設定した。

3. 研究内容の視点

「教室を国際化するにはどうしたらよいか」「共生の心を育てるにはどうしたらよいか」について理論研究を深め，会員相互の実践交流を進める。

また海外教育事情について研修し，管内へ還流する。その他，本会の目的に合致する事業を推進する。

4. 具体化にあたって

研究推進について

子どもの「異文化とのかかわり」に注目し，国際社会に生きていく「人間としての生き方」を考えていく研究を進めている。

本会の前研究では，めざす子ども像に基づき，「何が育つのか」「何を育てようとしているのか」という資質や能力の育成を図る実践研究を行ってきた。また，いつでもどこでも誰にでもできる国際理解教育の実践をということから，身近な教材とのかかわりを検証してきた。

その成果と課題から，自分と事象・他人の間に違いを違いとして認め，互いに尊重する態度や共生の心を育てる必要性があげられた。それは「生き方」を学ぶ場としての国際理解教育の重要性ということになる。一方，授業を構想する際には，身近な教材から自分と世界のかかわりを見いだし，多様な文化や存在を確認しながら共に生きていくことを学んでいくことにもなる。

本研究では，異文化とのかかわりに着目し，人間としての生き方を問う研究を進めており，「共生の心」を持った子どもたちが地球市民という立場で，どう問題を見い出し，働きかけ，解決していくかという問題解決の過程に注目している。

各地区の研究概要②

留萌地区研究の歩み

留萌地区研究部

1. 留萌地区研究主題

「国際化時代に主体的に対応していける子供の育成」

2. 研究主題設定の理由

本会は，研究主題を「国際化時代に主体的に対応していける子供の育成」の解明を志向し，継続して研究を積み重ねてきた。

また，留萌管内の実状に着目し，管内の国際理解教育の推進に努め，会員相互の研究実践交流を図り，意識の高揚と各校の国際理解教育の推進に寄与すること，諸外国の教育や文化について相互研修を積み，異文化理解や児童生徒への指導に生かすことを目的として本研究を設定した。

3. 研究内容の視点

⑴ 各分野において，国際理解教育の指導を学習指導計画にどのように位置づけていくか。

⑵ 人間理解，相互理解を意識した学習指導の展開をどう図っていくか。

4. 具体化にあたって

⑴ 留萌管内の実状に着目し，管内の国際理解教育の推進に努める。

⑵ 会員相互の研究実践交流を図り，意識の高揚と各校の国際理解教育推進の充実に努める。

⑶ 諸外国の教育や文化について相互研修を積み，異文化理解や児童生徒への指導に生かす。

具体的内容について

＊国際理解教育を位置づけた教育課程の作成について

＊各学校における実践研究の交流

5. 留萌管内国際理解教育ゼミナールから

◇期　日　平成11年11月8日（月）13：00～16：00

◇会　場　羽幌町中央公民館小ホール

◇参加者　管内小・中学校及び高等学校の校長，教頭，教諭　36名参加

各地区の研究概要②

⑴ 実践交流発表会

① 北海道国際理解教育研究大会 北見大会報告

管内国際理解教育研究協議会研究部員　森田　靖史教諭

（天塩町立天塩小学校）

全道国際理解教育研究大会の概要について森田教諭より報告を受け，管内の先生方への還流を図った。全道の国際理解教育の流れや当日の指導案等の資料により詳細な報告を受けた。

②実践発表（管内国際理解教育研究部員によるもの）

ア　「天塩小学校なかよし学級」における実践

（天塩町立天塩小学校教諭　藤田　泰昭）

題材名「天塩町体験ツアー～マンゼルさんと遊ぼう」の中で，天塩町在住の宣教師マンゼルさんのお宅を訪問し，交流学習を行った実践報告を受けた。

イ　「天塩中学校における国際理解教育の実践について」

（天塩町立天塩中学校教諭　佐川　聖明）

天塩中学校における英語科・社会科・選択（総合）における取り組みについての報告を受けた。

ウ　「教科指導における国際理解教育の実践」

（留萌市立緑丘小学校教諭　渡邉　裕子）

社会科「伝統に生きる工業」（5年生），音楽科「日本の民謡と子守歌」（5年生）における取り組みについての実践報告を受けた。

＊いずれの実践発表においても実際に実践されたものであり，大変参考となる部分が多く，その後の研究協議の中でも活発な意見の交流がなされた。

③講話　北海道立羽幌高等学校教頭　山岡　正史氏

演題　「今後の国際理解教育の在り方」

国際理解教育の多様性という観点・統一性という観点からとらえるとどうなるか，また，現在世界で起きているいろいろな問題を地球規模で解決するためにはどうしたらよいか。さらに，北海道における国際化の対応についてなど，幅広い観点からの講話をいただき，大変参考となる講話となった。

（この項：留萌地区研究部）

海外からの便り

在外教育施設より

元気なお便りが

届いています！

ワシントン便り

佐野　和人
（ワシントンD. C. 補習授業校　校長）

北海道の皆様，明けましておめでとうございます。私がワシントンに赴任してから，1年が経とうとしております。

私の赴任に際し皆様からいろいろな支援やアドバイスを頂き，本当に有難うございました。

私の赴任は2回目ですが，ロンドンとワシントンでは様子がかなり違います。まず道幅の広い事に最初は戸惑いました。車の方が優先と言うような感じで，ワシントン市内を一歩出た，私どもの住んでいるヴァージニアの住宅地では，歩道があまり完備されておりません。大きな車道を渡るときにはかなり危険で，アメリカ人のお年寄りでも走って渡るような有様です。ただ住宅は自然林の中に散らばっているような感じで，北大の構内や，野幌の自然林の中，苫小牧の北大の演習林のような所に住宅があるのです。これを見ると裕福だなあと思わずにいられません。

春，4月始めは，桜やつつじ，梨の花が一面に咲き，まるで北海道の春という感じです。夏は40度を越す日が多かったのですが，冬の雪は20～30センチほど降っただけです。これで官公庁も学校も郵便局も皆2，3日お休みとなりましたから驚いてしまいました。

補習授業校の仕事は日本人学校とかなり違い教育の難しさを再認識させられました。

まず日本人学校と違い先生方は全員現地で雇いますから教員免許を持っている人を探すのはほとんど不可能です。また教員の経験者もほとんど雇う事が出来ません。こちらで働けるビザを持っていない人は，雇う事が出来ませんのでなおさら難しいのです。そのような訳で，昨日まで家庭の主婦だったとか，良くて塾の先生をした事があるとかで経験のある人は本当に宝のようです。

日本で教師の経験のある方が31名中５，６人いるのですが，さすがに授業は上手です。授業ってこうでなければならない，と感じるのはその先生方の授業のみで，後はかなり困難を極めております。日本の教員の養成制度が本当に良いものだと理解出来ます。日本では初任者研なんかも数多く実施されますが，あれは本当に大切なものだと思います。あれだけ研修をこなして初めて教師として子供を教育できるようになるのだと思います。

補習授業校の仕事は先生方を，土曜日1日だけ雇って教育をしていただくための計画，其れに基づく準備を緻密にやっていると言うのが実態です。運動会も簡単な練習が１回だけです。先生方，父母の動き，ボランティア，運営委員会の動き会場設営等々，全ては事務局でのプランと先生方，運営委員会への１回の説明で動かすのです。毎回の授業も教材，教具の準備は手紙や電話，ファックス，Eメールで頼まれたものをこちらで準備します。

土曜日は朝早くから学校に出かけて鍵を開け，先生方を迎える準備をし職員朝会，授業が始まれば全員の授業をきちんと参観し，授業内容についての助言や指導をします。また事務所に帰ると，授業や子供の実態，校舎などの問題点などについて打ち合わせをし記録をします。

今年はカリキュラムを全面作り変えたので，校長も１年生から６年生までの国語を全部担当し，１月までにやり終えた所です。年末年始の休みは全然ありませんでした。その他にも多くの仕事があり数え切れませんが，ここで学習した子供が未来に確実に活躍する事を確信して頑張っております。

それと休みの日には，アメリカの歴史的な場所を訪れたり植物園に行ったり，年に数回の旅行を楽しみにしております。

大連からの風　No. 61　春　節」

工藤　信司
（大連日本人学校　中華人民共和国）

２月５日。中国の春節である。私にとって最後の春節であるため，今年は去年まで以上に気合いを入れて臨んだ。

２月４日の夜１０時過ぎから，大連では狂乱の花火・爆竹が始まる。その音，煙たるや，言葉では表現しようがないほどだ。もしどうしても言葉で表現するとなると「戦争」というのが一番ピッタリくるかもしれない。各家庭で思い切り花火と爆竹をやるのだ。それも日本で売っているようなあんなちゃちなものではない。日本では決して許可されないであろう爆弾の一歩手前というものが，ごく普通に売られている。私は前日までに５万発，2万発，2万発，5000発，5000発の合計10万発分の爆竹を３００元で買い込んでおいた。

そもそもなぜこんなに派手に爆竹をするのだろう。それは古い言い伝えによる。　昔々『年』という妖怪がいた。この『年』は人々に災いをもたらすやっかいなものだった。ちょうど日本の疫病神・貧乏神のようなものなのだろう。そこで『年』が家に寄りつかないように派手な音を出して追い払うことにした。これが春節に爆竹をする理由である。

２月４日午後6時。S酒店のご招待による，餃子パーティーに参加した。その席上，「今年は７時１６分に爆竹を始める」との話があった。当然，なぜ7時１６分という数字にこだわるのか質問した。しかし「6という数字が縁起がいい」とかなんとかということだけでよく分からない。実は中国では「6」よりも「8」の方がよっぽど縁起がいいことになっている。「8」は「要発（ヤオファー＝お金持ちになる）」の「発（ファー）」に発音が似ているため，何かと縁起を担ぐ人たちに重宝されているからである。

お腹がいっぱいになった頃，爆竹と花火が始まった。

とてつもなく大きな打ち上げ花火の箱が１０個，小さな打ち上げ花火の箱が５０個，爆竹はどれだけあるのか分からないほどである。それらに一斉に火がつけられた。私はすぐ側にいて，パチパチはじけて飛んでくる爆竹や小石を全身に受けながら満喫した。

この爆竹の際，Ｓ酒店の運転手の一人が顔を火傷した。彼は打ち上げ花火に火を着け，逃げようとした際，彼の後ろにあった別の打ち上げ花火の箱に気づかなかったのだ。彼が振り向いたときが，その後ろにあった打ち上げ花火がちょうど打ち上がった瞬間で，彼の顔をかすったというわけである。彼は眉毛がなくなり，首とおでこに火傷した。すぐに病院に行き手当を受け，「もう絶対に花火に火を着けない」と固く誓った。

その後さらに爆竹を満喫するべく，同僚のF先生と爆竹の箱を抱えてタクシーで市内へ出かけた。しかし，市内は意外と静だった。それはそうだ。まだ8時半を回ったぐらいなのだから。そこで，ただ一軒開いていた日本風居酒屋「吉兆」で中央電視台の春節晩会（＝年越し番組）を見ながら，餃子作りを手伝った。春節の夜は家族で餃子を作るというのが，中国の家庭の過ごし方なのだ。

１０時３０分過ぎ，外がにぎやかになってきた。いよいよ出番である。そこで買い込んでおいた爆竹に一気に火を着けた。爆竹はものすごい音を立て，はじけ飛んでいく。回りの爆竹の音と重なって興奮状態になった。

しかし終わってみると，なんだか呆気ないのだ。これではいけないとさらに爆竹を買い込み，よりにぎやかな場所を探しながら市内を歩くことにした。

その結果見つけた大連で一番爆竹が激しい場所は，友好広場の凱来酒店の横だ。ここは何百人もの人が一斉に爆竹をやっており，大声で叫んでも隣の人に声が届かないぐらいである。もし来年，春節の際どこかのホテルに泊まろうと考えている方には，凱来酒店をお勧めする。でも，決して寝られないだろうけれど。

後日談だが，この日，爆竹にまつわるかなりの事故があった。　大連晩報によると，大連の９才の女の子が打ち上げ花火がお腹に直撃して，重体となった。この子は，火を着けたもののなかなか打ち上がらない花火をのぞき込みに行たのだ。その時に急に花火が発射され，お腹に当たった。６階に住んでいる彼女のお母さんが下の騒ぎを聞きつけて下りてきて，真っ黒になった娘を見て卒倒してしまったとか。

広西自治区のある村では，町ぐるみで爆竹を作っている。ここの路上に１００m以上にわたって爆竹の出店が建ち並んでいた。どういう理由なのかは不明なのだが，そこに火が着いた。どれだけあるかわからないぐらいの爆竹が爆発し，５人が亡くなった。

爆竹ってやはり危ないものだったのだなあ。

日本メキシコ学院の概要

日本メキシコ学院　池田　勝徳

メキシコに来て，もうすぐ1年になります。4月当初はハカランダの花が咲いていて，メキシコに来たんだなあという気持ちになりました。現在，２月ですが日中の気温は２５度前後で暖かく，ハカランダの花も少しずつ咲き始めています。学校にある桜の木も，花が咲いています。でも，さすがに２２９０mの高地にあるだけに，朝晩は冷え込みます。一日の気温差が１５度くらいあり体調を整えるのが大変です。メキシコシティーは空気が薄く，そのせいで眠りも浅いです。休みにアカプルコなどに行くと，空気の濃さを実感します。夜もよく眠れます。また，今は乾季で一滴の雨も降りません。降ったのは昨年の９月に夕方ちょっと降ったのが最後でした。ですから，１０月から５月くらいまでは，行事での雨の心配はいりません。そのかわり，この時期大気汚染がひどく，外での活動が禁止されることもあります。今年に入って２月１日（火）２日（水）と2日間がコンタミナシオン（大気汚染指数）がひどく，外での活動が禁止されました。雨季に入ると心配ありません。雨季が待ち遠しい日々です。

さて，日本メキシコ学院というのは，日本コース小学部・中学部とメキシココース小学部・中学部・高等部それに幼稚園と異なる６つのセクションが同じ敷地内にある学校です。ここが，他の日本人学校と大きく異なる点です。ですから，プールや体育館・グランドもお互いのコースがぶつからないように調整しながら学習をしています。当然休み時間は，両コースが混じって遊んでいます。運動会はこれらのうち，５つのセクション（幼稚園を除く）が合同で行います。当然それに向けての会議も，両コースの先生方を交えて行われます。日本語とスペイン語の間に通訳が入っての会議です。自分も今年この係でした。言葉も去年の様子もよくわからず，睡魔とも戦いでした。これ以外に，交流授業を行ったり，メキシココースの行事に招待されたり，逆にこちらにメキシココースを招待したりということもしています。クラブも合同で行っています。

当然ですが，日本とは違うことがいっぱいあります。時間割もその一つです。

日本コースの時間割（1時限は４５分）

時限	時　程
1	8時４０分～　9時２５分
2	9時２５分～１０時１５分
3	１０時２０分～１１時０５分
休憩	１１時０５分～１１時30分
4	１１時３５分～１２時２０分
昼休み	１２時２０分～１３時０５分
5	１３時１０分～１３時５５分
6	１４時００分～１４時４５分
7	１４時５０分～１５時３５分
帰りの会	１５時３５分～１５時５０分

日本コースは４年から６年はこの時間割です。１年は週３回午前授業，2年生は週２回午前授業，3年生は週１回午前授業になります。こちらは，完全週５日制です。下校は１６：００です。遠い子ですと，スクールバスで約１時間。家に着くと５時過ぎになる子どもたちもいます。バス乗車指導で，年に２回ほど，自分の担当のバスに，子どもたちと一緒に乗ります。ほとんどの子どもたちが疲れて眠っています。それでも，日本に比べて治安が悪いので，家に帰ってから自由に外で遊べないのが現状です。そのため，少しでも学校で運動させ，運動量を確保してあげようという配慮からこの時間帯になっているようです。

メキシココースはこれとちょっと違います。こちらも完全週５日制です。比べてみてください。

メキシココース時間割（1時限は５０分）

時限	時　程
1	7時５０分～8時４０分
2	8時４０分～9時３０分
3	9時３０分～１０時２０分
4	１０時２０分～１１時００分
休憩	１１時００分～１１時３０分
5	１１時３０分～１２時２０分
6	１２時２０分～１３時１０分
7	１３時１０分～１４時００分
8（4．5．6年のみ）	１４時００分～１４時５０分
下校	１４時５０分～１５時００分
クラブ	１５時００分～１６時００分

なぜか４時間目だけ４０分です。メキシココースのクラブは日本のクラブとは違います。希望者がとるので，希望しない子どもたちは１５：００で下校になります。ですから，下校のあとにクラブが入っているわけです。

大きな違いの２つ目は，給食がないということです。基本的には，お弁当をもってきます。ですが，学校にカフェテリアがあり，そこでハンバーガーやタコスなどの食べ物，ポテトチップなどのお菓子，ジュースなどを売っています。お弁当の代わりにそれを買って食べる子どももいます。現在５年生を担任していますが，音楽・家庭科・図工は専科の先生が教えてくれます。その時間は空き時間になるので，そんな時間に我々も利用しています。

３つ目は日本メキシコ学院としての制服があることです。メキシココースも日本コースもみんな同じ制服です。体育の時は体操服に着替えます。ですが，この制服を買い揃えるというのが難しいのです。メキシコの場合，制服業者が約束の日までに出来上がっていなかったり，制服販売日に，学校に何の連絡もなく休んだりする事がしょっちゅうあるのです。自分の子どもの制服を全部そろえるのに４ヶ月近くかかりました。まだいい方かもしれません。最初はいらいらしていましたが，それ以外にもこのようなことはしょっちゅうあるので，最近は「まあしょうがないか」と思えるようになりました。

まだまだ，違いはいっぱいありますが，紙面の都合上このくらいにします。任期は残り２年。がんばっていこうと思います。それではまた。

太陽の国メキシコより　池田 勝徳

会費の納入はお済みですか？

日頃より本会の活動につきまして，深いご理解とご支援をいただき誠にありがとうございます。

本会は，皆様の会費によって運営されております。本年度分の会費の納入はお済みですか。

会費は全道大会の運営と研究推進，会の円滑な運営，推進のため，お手数でも滞りなく納入いただきますようお願い申し上げます。

なお，納入状況につきましての照会は，事務局会計澤田　崇までお願い申し上げます。

＜照会先＞
事務局会計　澤田　崇
（札幌市立篠路小学校）
TEL　011−771−2221
FAX　011−771−1290

北海道国際理解教育研究協議会
年会費　3000円

郵便振り込みにてお願い致します

振 込 先　　澤田　崇
口座番号　　02750−4−3409

通信欄には，
氏名，支払い年度，おわかりでしたら会員番号もお書きいただけると幸いです。

ＩＥフォーラム

研究部長　　中村　　淳
（札幌市立月寒小学校）

新学習指導要領への移行年度を間近に控え，総合的な学習の時間の内容として，英語学習の必要性が議論されている。先日行われた小渕首相の施政方針演説でも，２１世紀の日本に向け，新たな教育改革の必要性を訴えていた。その中でも「英語教育」の推進を主張していた。これらの動きを受け，現場に英語教育の見直しの機運が今後はますます高まっていくことであろう。

しかし，論議の中で母国語としての「日本語」の役割について論議が手薄なのは気になるところである。バイリンガルを育てる上でも重要なのは，母国語としての言葉とその背景にある文化の存在である。いろいろな言葉を操りながらアイデンティティに悩む子どもたちの心の葛藤も報告されている。

自分を育ててくれた文化への誇りは，自分の生き方の根底にあるものである。「リテラシーとしての英語教育」の推進の方向を探り，地球市民としての日本人を育てていくことが大切ではないだろうか。

図　書　紹　介

総合的な学習に適した　　ポートフォリオ・学習と評価　学事出版

小田　勝己（おだ　かつみ）　城西国際大学人文学部国際文化学科講師
＊官庁の在米勤務を経て，現在は大学で英語スピーチの講座を担当しながら，英語の指導と評価について研究を進めている。

間もなく，「総合的な学習の時間」が実施されようとしている。その際，課題の一つにあげられているのが「評価」の問題である。学習指導要領では，従来のような点数による評価を行わないことが示されていることから，新たな評価のあり方を問われることになり，特に，子供一人ひとりの能力と進歩のあり方を振り返る客観的な評価方法が求められるようになった。

自分の変化とプロセスを評価する方法として脚光を浴びているのが「ポートフォリオ」による評価である。本書は，著者がアメリカでの実践をもとに，まだ日本では研究の進んでいない「ポートフォリオ学習」について紹介している。歴史的な沿革についても書かれているので，実践の紹介にとどまらず，その理論的な背景も理解することができるので，入門書として適切な本だと言える。

ご意見，ご感想を
お待ち申し上げております

国際理解メールポストアドレス
Kokusai-spk@col.hi-ho.ne.jp

マーライオン（シンガポール）

発行：北海道国際理解教育研究協議会広報部

会　　長　　高橋　承造（札幌市立苗穂小学校長）
事務局長　　真木　孝輝（札幌市立真栄小学校教頭）
広報部長　　廣島　　直（札幌市立みどり小学校）